

主の降誕 日中のミサ

2012.12.25.

ヨハネによる福音 1・1-18

クリスマスの夜が明け、朝の光の中で私たちは教会が祝うクリスマスの日中のミサに参加しています。この、朝の光の中で、あのベツレヘムの馬屋でマリアとヨセフが迎えたであろう、新しい朝の情景を思い浮かべながらこのミサをささげたいと思います。マリアとヨセフにとって、あのクリスマスの夜が明けて迎えた次の日の朝は、それまで経験したこのない全く新しい朝であったに違いありません。産まれた子を布に包んで飼い葉桶に横たえなければならなかったあの夜、マリアとヨセフはどのように過ごしたのでしょうか。夜が明けて差し込む朝の光の中で、あらためて、飼い葉桶の中のその子の顔に見いった時、マリアとヨセフの心はどのような喜びに包まれたことでしょうか。マリアとヨセフは直感的に悟っていたに違いありません。彼らの心の底から突き上げ、彼らの全身を包むこの喜びは、産まれたその子が、神のもとから彼らにもたらしてくれた喜びであることを。マリアとヨセフを包むこの喜びは、私たちにも窺い知ることが出来ないものではありません。人の子の親となった経験を持つ人は皆、あのクリスマスの夜が明けた朝の経験をしているはずです。

マリアとヨセフが迎えた朝の光は、ベツレヘムの町に住む人々の上にも降り注ぎ始めていたことでしょうか。けれどもベツレヘムの人々が迎えたその朝の光は、私が迎える多くの朝のように、いつもと変わることはない朝の光です。そのいつもの朝の光の中で、私たちがささげているクリスマスの今朝のミサは、マリアとヨセフを包んだに違いない、天来の真の喜びの光へと私たちを招いています。教会のクリスマスの祝いは、もちろんイエス・キリストの誕生を祝う祝いですが、その真の意味は、あのクリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋にお生まれになった神の子イエス・キリストが、今朝もいつもの朝を迎えている私たちにもたらしてくださった神のいのちの輝きを祝うことにあります。

その神のいのちの輝きについて、今朗読されたヨハネ福音書は次のように語っていました。

「いのちは人間を照らす光であった。光は暗闇の中に輝いている」。クリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋に産まれたマリアとヨセフの子が私たちにもたらしてくれたのは、このような光であるとヨハネ福音書は語っているのです。

あらためて、今、聴いたヨハネ福音書の初めから読み直してみると、次のように語られています。「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあった。

ことばは神であった。・・・ことばのうちにいのちがあった。(そしてその) いのちは人間を照らす光であった」。マリアとヨセフを包んだ喜びに満ちた光は、お生まれになった嬰兒のいのちの光です。そのいのちの光は、天使ガブリエルを通してマリアに告げられた神のことばがもたらしたいのちの光です。それはまた、ヨセフに夢の中で語られた神のことばがもたらしたいのちの光です。さらにそれは、このクリスマス、聖書を通して語られる神のことばを信じて、救い主の誕生を祝っている私たちをも包んでいるいのちの光です。クリスマスを祝う私たちの喜びは、聖書が語るあの嬰兒がそのいのちをもって私たちにもたらしてくれた、いのちの光に包まれる喜びです。マリアとヨセフ、そして、ここに集う私たちを包む、お生まれになられたイエス・キリストがもたらしてくださった、いのちの光の喜びの源は、ヨハネ福音書が告げているように、神のことばにあります。その神のことばは、天地創造のはじめに響いた「光あれ」という全てのいのちの創造主である神のことばです。しかし、今、聴いたヨハネ福音書が語ることはそこで終わってはいません。

「ことばは肉となって、私たちの間に宿られた。私たちはその栄光を見た」。ここにヨハネ福音書が告げるクリスマスの喜びの源である、究極のいのちの光の本体が示されています。神のことばは肉となって私たちの間に宿られた。そのことによって私たちは神ご自身である、神のことばの栄光の光を見ることが出来たのです。クリスマスを祝うとは、ヨハネ福音書が告げる、神がそのことばによって私たちのうちに実現してくださったこのような壮大な神の愛のドラマを味わうということです。

この神の愛のドラマを理解し、味わうためのキーワードは、「はじめにことばがあった」と語りだされている「神のことば」です。何故ヨハネ福音書は、その書き出しの冒頭に、「初めにことばがあった」と語っているのでしょうか。ことばは神だからです。神はことばだからです。神ならざる私たちのことばも不完全ながらも、自分の心の内を外に向かって表明します。内なる思いはことばとなって外に向かって吐露され、波紋を広げてゆきます。その波紋の広がるどころ、私たちは自分が発したことばの責任を問われることとなります。神ならざる私たちの限界は、私たちの発することばが、わたしたちの内なる思いを裏切るということです。そしてまた、私たちは誰も、自分が発したことばの責任を完全には負いきれないということです。人間は自らのことばを裏切る存在です。そのような者として、私たち人間はことばになりきることが出来ない存在です。神がことばである理由はここにあります。その証が、ことばによる天地万物の創造であり、神のことばそのものであるお方が肉となってわたしたちの間に宿られたことです。先ほども言ったように、ことばは内なる思いの表明です。神のことばは神の内にある神の思いのあらわれです。

神のことばによる天地万物とそれを満たすいのちの創造は、この世界とその中に生きる全ての者がそこに存在し、そこに生きることを願うことばとして表明された神の内なる愛の思いの現われです。神よってその存在を与えられたこの世界と、そこに住む私たちの中に、私たちと同じ肉を持つ一人の人間として宿られた神のことばは、私たちへのこれ以上にはない、神の愛の想いを表明しています。ここに神の栄光の光が輝いていると、ヨハネ福音書は告げているのです。

ベツレヘムの飼い葉桶の中に眠る幼子において、このような神のことばが宿っており、その幼子として宿った神のことばの荘厳な栄光の光が、今私たちを包むこの世界の暗闇の中に輝いていると、ヨハネ福音書のクリスマスのメッセージは告げているのです。そればかりではありません。そこに宿った神のことばは、それを受け入れた私たちを、あの幼子のいのちそのものに与らせてくださるために、私たちをその神のいのちに招き入れるために、そこに息づいていると告げているのです。天地万物の創造から始まる神のことばの全歴史は、それを目指しているとヨハネ福音書は、私たちに告げているのです。

光を受け入れるとは、光に同化するということです。私たち自身が光になれば、光を受け入れることは出来ません。光としてこの世に宿られた神のことばは、そのような仕方で、つまり私たちを彼と同じ光に包まれたものとするために私たちの中にお出でくださったのです。私たちにはまぶしすぎると思える、このような神のことばの私たちへの受肉を願って、このクリスマスの神秘をともに祝いたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高